

留学生と日本人学生の持続的な関係構築を目指したスタディツアーの試み

山田 智久

要 旨

学内の国際交流の活性化及び留学生と日本人学生の持続的交流を目指し、協同学習を取り入れたスタディツアーを企画した。第一回と第二回のスタディツアーから見えてきたことは、留学生と日本人学生の交流が続くためには、「ある一定の期間を一緒に過ごすこと」、「ことばだけに依存しない協同作業が必要なこと」など、一定の要件を満たす事が重要であることが分かった。

【キーワード】 国際交流、協同学習、意識変容

1. はじめに

昨今、外国や国際交流に興味を示さない日本人学生の内向き志向が問題となっている。確かに、本学の状況を鑑みても、外国の提携校へ留学する日本人学生は、それほど多くはないし、学内の国際交流行事へ参加しても、関係がその場で終わってしまう傾向にある（山田, 2011）。その理由を学生の質の変化と結論づけることは簡単だが、我々教職員にも現状を変えていく責任はある。

本稿の筆者は、上記の現状を打破するために留学生と日本人学生の協同学習型スタディツアー（以下、ST とする）を企画した。ST は、留学生と日本人学生の接触場面を増やし、異文化体験の機会を増やすことで、持続的な交流へと繋げる試みである。本稿では、ST の概要を紹介するとともに、第一回 ST（以下、ST1 とする）と第二回 ST（以下、ST2 とする）の比較から得られた知見を提示し、どのような要件を満たすことにより、留学生と日本人学生の交流が持続するのかについて検証する。

2. スタディツアー企画のきっかけ

本学に在籍する留学生に日本人学生との交流について尋ねてみると、次のような不満が多く出る。

「日本語が下手だから、日本人と話すのが怖い」

「日本人学生と話したいが、きっかけがない」

「日本人学生とイベントで知り合いになっても、イベントが終わると関係も終わる」

「国の紹介などではなく、もっと深いことについて議論してみたい」

もちろん、全ての留学生が同じ事を思っているわけではないであろうが、上記のような意見は、非常に多く耳にする。では、日本人学生は、どう考えているのであろうか。彼らからは、次のような意見を聞く。

「外国、外国人にあまり興味がない」

「何語で話しているのか分からない」

「何を話して良いか分からないから、話しが続かない」

「留学生がどこにいるのかが分からない」

双方の意見を集約すると、「ことばの壁の存在」、「関係構築のきっかけの欠如」、「関係を持続する難しさ」の3点が浮かび上がる。ことばの壁は、容易に理解できるが、関係が続かないという点は、興味深い。本学では、留学生センターを始め、様々な部局で国際交流イベントが開催されている。主催者側からすると、イベントを増やしていくことで、国際交流の機会が増えて良いことだと前向きに捉えがちだが、留学生や日本人学生は、必ずしもそうは感じていないようである。語弊はあるが、一回限りのイベントでは、関係構築のきっかけを提供することは出来ても、長く続く関係の土台を作る事は難しいのかもしれない。そのため、本稿の筆者は、留学生と日本人学生とで共通課題に取り組む ST を立案し、長く続く交流の基礎を築くことを目指した。

3. スタディツアーの概要（第一回）

ST は、留学生と日本人学生が、渡航地に関する文化、言語、生活様式、伝統などについてトピックを設定し、調査を行ってから旅行へと繋げるプロジェクトである。

3-1. 実施時期

ST1 は、2010 年 11 月に参加学生の募集を経て、12 月から翌年 2 月まで勉強会を開催し、翌年 2 月 22 日から 24 日に旅行を実施した。

3-2. 渡航地

渡航地は、本学に在籍する留学生がもっとも訪れたい場所として挙げる北海道の札幌、小樽とした。ST コーディネーターである本稿の筆者が、北海道出身であるため、北海道に関する知識、情報の享受が可能という点も考慮した。

動機付けの維持も視野に入れた。参加学生は、必ず北海道へ行けるという明確な保障があるため、勉強会の課題で負荷がかかっても、乗り越えることが出来ると予想した。見学先は、2泊3日で見学が可能な点から、北海道開拓の村、羊ヶ丘展望台、北海道大学構内、小樽市街、ウィンタースポーツミュージアム、大倉山展望台、カルビーポテトチップス工場とした。

3-3. 参加学生とグループ編成

ST では、日本人学生1名と留学生4名で一つのグループを編成した。当初、日本人学生の参加人数を増やしてはどうかという意見もあったが、あえて1名にした。その理由は、グループに対する責任が分散しないようにしたためである。協同学習型の授業を担当していると、日本人学生同士が遠慮して、作業がなかなか進まない場面に遭遇する。ST においても、留学生からの質問や教員からの指示に対して、遠慮し合い、本音の交流が実現できない可能性があると判断したため、日本人学生1名でグループの留学生に対するケア、プロジェクト進行を行ってもらうこととした。

日本人学生1名に対し、留学生を何名にするかは、バークレイ (2005:34) のグループ編成の考え方を参考にした。彼女の説明によると、適切なグループ学習のサイズは、5名であるという。4名のグループでは、2名と2名になってしまい、3名のグループでは、2名がペアになり、1名が余ってしまうからだという。6名でも、参加者の体験密度は低くはなるが、うまくいくと彼女は述べているが、STでは、日本人学生1名でグループの留学生と接するため、留学生4名が妥当と考えた。

コーディネーターが、勉強会で綿密に対応できるのは、5グループと判断し、参加学生は、日本人学生5名、留学生20名とし、学内で応募を募った。その結果、応募者は、日本人学生10名、留学生92名となり、その中から、性別、国籍、学部、属性、学年、日本語レベルを勘案し25名の参加者を決定した。なお日本人学生には面接も行い選考した。参加者の内訳は、表1の通りである。

【表 1：参加学生内訳】

男女比	男性 9 名、女性 16 名
国籍・地域	日本 5 名、中国 7 名、韓国 3 名、スリランカ 3 名、ベトナム 3 名、台湾 2 名、タイ 1 名、インドネシア 1 名
学部（研究科）	経済学部 7 名、文化教育学部 7 名、理工学部 5 名、農学部 5 名、医学部 1 名
身分	正規学部生 10 名、研究生 2 名、大学院生 7 名、交換留学生 6 名
日本語レベル	初級 10 名、中級 8 名、上級 7 名、日本語ネイティブ 5 名

特に留意したのが、身分と日本語レベルである。本学で学ぶ理系大学院生と研究生の多くは、英語で研究を進め、大学院生、研究生同士で行動をすることが多いため、学内の日本人学生や他学部の留学生との接点が少ない。ST では、大学院生と研究生を接触があまりない日本人学生や留学生と繋げることに意識を払った。また、1 グループの留学生の日本語レベルは、上級 1 名、中級 1～2 名、初級 2～3 名とし、グループ内での日本語学習の教え合いも期待した。

3-4. 勉強会と課題

渡航前に、勉強会を実施した。勉強会は、2010 年 12 月 10 日に 2 時間、2011 年 1 月 21 日に 2 時間、2011 年 2 月 18 日に発表会を兼ねた勉強会を 3 時間の、計 3 回実施した。これら 3 回が参加義務のある勉強会で、それ以外は、各グループで時間を設定して集まるように促し、日程調整を日本人学生に任せた。

課題は、「自分たちの旅のしおりを作る」こととした。北海道に関連するトピックを自分たちで設定し、5 グループの発表原稿を集めたものを一冊でしおりを作り、北海道旅行で活用出来るようにした。

3-5. 発表会

発表会は、2011 年 2 月 18 日に行った。発表時間は、一グループ 15 分以内とし、発表者は、日本語初級・中級レベルの留学生に限るという決まりを設けた。これにより、発表者の日本語学習を日本人学生と日本語上級レベルの学生が支援する流れを期待した。

3-6. コーディネーターの役割

本稿の筆者が、STの企画、勉強会のコーディネート、旅行の引率を行った。その際に、留意したことは、コーディネーターが指示しすぎないことである。杉江他（2004:40）も指摘しているが、教師が学生に指示を出しすぎると、学生が教師の顔色をうかがうようになり、自発的に考えることができなくなる。そのため、本プロジェクトにおけるコーディネーターの主たる役割は、旅行業者との交渉、事務職員との連絡、勉強会でのアドバイス、日本人学生からの報告の記録とし、ファシリテーター役に徹することとした。

3-7. 経費

最大の懸念事項が旅行の経費であった。本学留学生センターでは、年に2回、留学生向けの研修旅行を実施していたが、その一つを廃止し、STの経費として計上することが出来た。これにより学生の負担が格段に減り、学生の個人負担は、1万円以下に抑えることが出来た。

4. 第一回スタディツアー実施報告

4-1. 勉強会での観察から

初回の勉強会の前に、日本人学生5名に集まってもらい、プロジェクトの概要説明及びグループの留学生メンバーを知らせた。グループ構成は、Vygotsky (1978:86)の最近接の発達領域説を参考にし、本稿の筆者が1) 日本人学生が履修している第二外国語、2) 学部などの属性、3) 参加者の性格などを考慮して編成した。これにより、一人では解決できないことをグループ単位で解決していき、その中で学びが起きることを期待した。

初回の勉強会では、自己紹介を済ませ、今後の予定について各グループで決めてもらったが、すぐに終わるグループと時間がかかっているグループがあった。時間がかかったグループの一つは、グループの中での共通言語を英語にするのか、日本語にするのかで混乱が生じていた。このグループは、日本語初級レベルの大学院生と研究生が入っているグループで、この2名が英語で率先して話し、それに学部生の日本人学生が押し切られているようだった。

初回の勉強会にて、各グループのトピックが次のように決まった。

- A) 北海道の特産品 B) 北海道の冬の暮らし C) 北海道の食文化
- D) 北海道の方言 E) 見学地の概要

第二回の勉強会では、グループごとの差異が明確に現われていた。きちんと役割分担をして分業で作業を進めているグループが2つのみで、他のグループは、何をどう進めていいかで悩んでいるようだった。順調に作業を進めている2つのグループに、初回の勉強会後に、何をしたかを尋ねると、食事会・飲み会を開いたり、昼ご飯を一緒に食べたりと、少ない時間でも集まる頻度を増やしていたようである。反面、作業がうまく進んでいないグループは、初回勉強会後に公式な集まりを設定し、それまでに、各自で作業をしてこようとして、個々が負担を感じていたようである。

4-2. 勉強会以外の観察から

特筆すべきは、勉強会以外でのコミュニケーションである。参加した日本人学生全員から、勉強会以外での留学生とのミーティングについて相談を受けた。要点をまとめると、次のようになる。

- ・忙しいと言って集まってくれない。
- ・メールを送っても返事が来ない。
- ・次回までにやってきて欲しい作業をやってきてくれない。

ST 企画当初は、どのグループも発表の準備で苦勞をすると予測していたが、意外なことに、集まるための調整で苦勞をしている学生が多かった。ある日本人学生は、次のようなメールを筆者に送ってきた。

「来週の月曜日の12時に学食で集まりましょう！とメールしても、そのメールに誰からも返事がないんです。そういうのが、積もっていき、なんかメンバーを信頼できなくなってきて。。。」





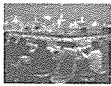
このグループの留学生に、「Aくん（日本人学生）が、みんな（留学生）からメール来なくてさみしいって言っていたよ」と尋ねてみたところ、4名中、3名が、「集まる時間も場所も分かったから、それで問題はないはず。」と答えた。このような小さなコミュニケーションの行き違いが、やがて大きい壁となり、交流が続かない要因となり得ることが見えてきた。

4-3. 旅行での様子から

旅行は、欠席者もなく、2泊3日の日程で無事に実施された。印象的だったのが、コーディネーターが指示したわけでもないのに、現地ではグループ単位で動いていたことであった。経験的なものでしかないが、留学生と日本人学生を旅行に連れて行くと、最終的には同じ国籍で集まってしまうことが多い。STにおいては、勉強会と勉強会以外での接触が多かったためか、グループの結束が強まり、グループメンバーと旅行を楽しもうという意識が強くなったのだと推測できる。また、他のグループのメンバーとの交流を深めようという目的で、バス内で席替えをしていたのも記憶に残っている。

自由行動の時間には、自分たちで作った旅のしおりをもとに、回転寿司や居酒屋に行っていたようである。中には、朝の5時に起きて、朝市を訪れていたグループもあった。自分たちが調べて作ったものが、実際に現地で役立つという狙いは、成功したようである。

【資料1：旅のしおり】

<p>店名：ヴェトナムキッチン フーコック (ベトナム料理)</p>  <ul style="list-style-type: none"> 住所：北海道札幌市中央区南3条西7丁目 RAKUWAGINATION 2階 電話011-272-0477 営業時間： ランチ12:00～16:00 ディナー17:00～23:00 *定休日：月曜日定休 	<p>韓式 もつ屋</p>  <ul style="list-style-type: none"> 住所：〒060-0807 北海道札幌市北区北7条西5-6-2 長寿庵ビル1F アクセス：JR札幌駅 徒歩5分 TEL011-716-0628 営業時間： ランチ 11:30～15:00 ディナー17:00～23:30 *定休日：無休 *平均予算： 2,800円(通常平均) 3,500円(宴会平均) 800円(ランチ平均)
<p>根室花まる・お店情報</p>  <p>JRタワーステラブレイス店</p> <p>住所：〒060-0005 札幌市中央区北5条西2丁目 TEL：(011) 209-5330 FAX：(011) 209-5331 営業時間：AM 11:00～PM 11:00</p> <p>JR駅のJRタワーステラブレイスの6階の飲食街大丸側</p>	<p>廻転ずしとっぴ〜・お店情報</p>  <p>エスタ店</p> <p>札幌市中央区北5条西2丁目 札幌エスタ10F TEL 011-271-6720 ●営業時間 / 午前11:00～夜10:00 ●席数 / 40席</p> 

4-4. 学生のレポートから

ST 終了後、日本人学生が次回参加する学生たちのためにレポートを残しておきたいと自主的に申し出てくれたので、次の3点について書いてもらった。ここでは、紙幅の都合により、3名のレポートを掲載する。レポートは、原文のままである。

- 1) 北海道 ST で楽しかった点、困難を感じた点
- 2) 通常の国際交流と北海道 ST の違いは何か
- 3) その他、自由コメント

学生 A (日本 : 男性)

1) 北海道 ST で楽しかった点、困難を感じた点

北海道 ST を通して、楽しかったこと・困難であったことは、多くある。中でも特記すべきは、北海道 ST 前の調べ学習だ。これが簡単ではなかったことは間違いない、やはり留学生もそれぞれの勉強、バイトがあるし、自分も別キャンパスだったということから全員で集まれる日を調整するというのが難しかった。この日程調整は日本人学生に委ねられ、他のグループも苦労していたようだ。ある程度、強引にこの日に絶対来てねと決める必要もあった。そして、パワーポイントを作るという作業では、各自が作ってきて、ミーティングでそれを見せ合うというやり方をしようとしても、パワーポイントができませんでしたと直前にメールがくることも。これは日本人学生でもあることで、留学生でも僕らと同じ大学生だなと思う部分でもあった。しかし、最後に留学生たちだけが、前に立ちプレゼンしているときは、子供の学芸会に来た親のように緊張したが、なれない日本語を使って懸命に説明し、しかも笑いまで取る留学生に驚かされたし、成功したときは純粹にうれしかった。事前課題で、自分が今でも反省しているのは、パワーポイントを作る段階にて、留学生のアイデアを引き出せなかったことだ。他のグループの発表を見て、実にユニークだと思った。調べ学習の最初の話し合いのときに自分の中で、最後の出来上がりのイメージが出てきて、どうしてもそこに落とし込もうとしてしまった。日本人よりクリエイティブに富む留学生の力を生かせなかったことは、本当に残念である。そしたら、もっと彼らにとっても楽しい時間を作れたのではと思うので、すごく大きなことを学んだ。今後の留学生との交流だけではなく、学生団体等で活動するに、反省を生かしていきたい。北海道 ST は事前課題があるからこそ、より難しく、楽しくなり、やりがいあるものになったと思う。

2) 通常の国際交流と北海道 ST の違いは何か

上でも述べたように、事前課題の存在は大きい。それに加えて、3日間寝食共にするというのも普通の国際交流とは違う。やはり、人との関係との深さは共に過ごす時間に比例すると思う。朝昼晩一緒にいると、その人がどんな人か分かってくるし、いろんな話をする時間がある。これは大学生のあらゆるイベントでも同じだ。合宿形式で行った時の方が、時間の濃さが違う気がする。だから年に何回かでもこのように、寝泊りも一緒にする機会を設けると、その時に非常に親しくなれるので、その後の親交も続くはずだ。

3日間という濃い時間を過ごすことに加えて、準備の段階から始まる一連の流れで、お互いの良いところだけでなく、良くないところも見えてくる。パワーポイントを忘れていつも、笑顔でごまかそうとする子や（しかし、そのスマイル負けてしまいます自分がいるが・・・）、試験前だからといってこれから1ヶ月は会えませんかと言う子や（そしたら発表直前まで何もできないことになっちゃうよと思いつつ、真面目な人だなと感心する部分も）。そして、何よりも自分のダメなところをサポートしてもらったことだ。自分はよく遅刻するので、毎回オンタイムの留学生が、他の留学生をまとめていてくれた。北海道に行ったときも、夜は北海道の友達と飲みに行き、帰るのが遅いときがあったが、ホテルの部屋の鍵を開けて待っていてくれるなど、自分が迷惑をかけることが多かったのではと思う。それでも、今でも「マッチャン」と言って親しんでくれる彼らに感謝である。

3) その他、自由コメント

この振り返りを書いていて、留学生との交流とは他の大学生と交流することと変わらない部分があると思う。彼らも佐賀大学に学び、充実した時間を過ごすために来ている。ただ、彼らの出身がアジア諸国というだけである。そのために、彼らは苦労していることもあるから、その話を聞くと、自分へのモチベーションにもなる。また、普通の日本人の大学生では、「島根ではまだ車が走っている」など出身地の話をしてもあまり実りのある話にはなりにくい。が、留学生の彼らから宗教の話や、母国での学校生活の話などを聞くと、他の国のことを生で知ることになるので勉強になる。そして、「日本についてどう思う」という会話は、日本人として非常に学ぶことが多い。日本に留学してくるまでなので、日本が好きなのは分かるが、彼らが客観的に感じる日本のすばらしさを話してもらい、日本人としてうれしく思う。だからこそ、今後も今の留学生たちのように、日本を良く思ってくれる留学生が絶えないよ

う、より良い日本を作っていくために自分もできることをしたいと思う。留学生と交流することで、日本人としての自分ということも、より知れるのではとも感じる。

学生 B（日本：女性）

1) 北海道 ST で楽しかった点、困難を感じた点

自分達で集まる日を決め、自分達のペースでプレゼンの準備を進めていけたことが良かったと思う。グループ全員の都合を合わせて集まることは困難ではあったが、その分ミーティングの日は限られた時間で集中して取り組むことが出来た。単にプレゼン作成に必死になるのではなく、それぞれの日常生活や出身国にまつわる話、夢や目標など何気ない会話を自然に交わせた時間はとても楽しかったし、印象的である。何よりお互いのことを知って、仲を深めることが出来たのではないかなと思う。ただ、日本語レベルも様々である留学生を、日本語でプレゼン発表！という最終目標にどうやって導くか、また、プレゼンを日本語で作成する、ということに抵抗を感じている留学生のモチベーションをどうすれば上げることが出来るのか、など最終発表会までは色々悩むこともあった。しかし、発表会当日の留学生の懸命な姿勢にとっても感動したし、改めて ST に参加できたことを光栄に思った。

北海道 ST 期間中は、グループ問わず全員と様々な活動を通して沢山会話が出来て良かったと思う。特に川名さんのアイディアでもあるバスの席替えは、留学生一人一人と話す良い機会だったと思うし、お互いのことをより知ることができた。また、留学生も席替えを気にしてくれていたようで、席替えをする側としては楽しかった。

自分自身初めての北海道で、留学生と全く同じ境遇だったので、見て触れて食して体験して、と吸収できるものが非常に大きかった。物の考え方や捉え方、価値観、テンションなど、日本人と旅行や生活するだけでは決して気付くことが出来ないようなことを留学生から教わったと思う。

2) 通常の国際交流と北海道 ST の違いは何か

これまで学内で催される様々な国際交流の場（各種パーティーなど）に参加させて頂いたが、どうしても短時間での関わりになってしまうことが多く、その場限り、または挨拶程度で終わってしまうということが多々あった。一方、北海道 ST では、協力して取り組みやり遂げる、そして寝食共にする中でお互いのことをより理解し信頼関係が構築されていくと思う。

また、調べて集めてきた情報を実際に現地に赴いて確認することで、日本（北海道）のこ

とを知ることが出来ると思うし、留学生自身も、留学中の思い出として残せるのではないかなと思う。

通常の交流では受け身側で参加することがほとんどであり、自らが主体となって取り組むことが少ない。それゆえ、比較的仲の良い、同じ国籍の友人同士と固まってしまうがちに思える。

一方、北海道 ST では、グループはそれぞれ出身国や年齢・学部など全く異なるメンバーで構成される。そのため、自ら受け身の姿勢ではなく自主的に会話に参加し、グループワークを行っていかねばならない。はじめは困難なこともあるが、それを乗り越えて協力し合ってやり遂げることに意義があり、また、それが ST が終わった後も関係を継続することができる要因だと思う。

3) その他、自由コメント

北海道 ST を終えて3カ月が経過しましたが、ST に参加した留学生がよく「また北海道に行きたい」「自分の国に帰りたくない」などと言っています。私もそんな留学生の言葉を聞いて、本当に嬉しく思います。

『ぼくらの旅～in北海道～』の通り、一人一人がこの北海道 ST を通してたくさんのことを学んで、それぞれの旅を作り上げることが出来たのではないかと思います。また、このツアーに参加した日本人や留学生問わず「〇〇さんは、このツアーを通して日本語が上手になったね」と言っています。留学生同士もお互いに日本語の上達を認め合える関係がとても素敵なことだと思いました。

留学生もおそらく日本語でのプレゼン作成・発表に不安を感じていたと思います。しかし、精一杯努力して作り上げてきたからこそ達成感を得られたと思うし、私も留学生の熱心さを見習って行かなければならないと思いました。このような機会を与えて下さって本当にありがとうございました。

学生 C (日本：女性)

1) 北海道 ST で楽しかった点、困難を感じた点

困難を感じた点は、グループで集まろうとしてもメンバーそれぞれが研究室やバイトでなかなか予定が合わなかったことがまず挙げられる。グループでの話し合いに遅れて来たり、早めに帰ったりと、全員が揃う時間自体は少なかったように思う。そのため調べ物やパワー

ポイント作りは分担して各自で準備することになっていたが、もう少し時間に余裕があれば全員で集まって話し合う機会を増やし、内容をもっと充実させてまとまりのある発表をしたかったと思う。また、留学生の日本語能力の差も作業を進める上でかなり戸惑った。私のグループでは、まだ日本語で意見を交わし合えるレベルでない留学生が一人いて、私が今後の予定について日本語で説明して他のメンバーは理解していても、その子だけが分からずにいて最初はかなり困惑した。パワーポイントを作る作業でも日本語が上手な子に頼りがちだったように見えた。だが、本人も必死で日本語を理解しようとしていたし、自分が担当している箇所は日本人に手伝ってもらいながらもキチンと調べてきていた。グループのメンバーも、（単に英語がそんなに得意ではないだけかもしれないが）言いたいことを書いてみたり、ジェスチャーや（合ってるか分からない）英単語でその子に伝えていた。他にも、中国人同士で中国語で話していることもあったが、話し合いを重ねるごとにそのような場面も少なくなっていた。最初はこのような戸惑うことも多々あったが、何回か集まるうちに雑談で盛り上がるようになり集まる日がとても楽しみになった。そして、旅行中は夜の自由行動で遊びに行ったり、バスの座席を毎回変えるなどして自分のグループ以外のメンバーとも話すようになり輪が広がると更に楽しくなった。

2) 通常の国際交流と北海道 ST の違いは何か

通常の国際交流と違い、ST は調べ学習から発表までの作業を一緒に行って、愛無い会話だけでなく真面目な話もする、という中身のある時間を共有していることが大きな違いだと私は思う。やはり同じものを見据えて共同作業をすると、距離が縮まるように思える。そして北海道ツアーが終わって3カ月が経った今も、細くではあるが関係は続いている。顔合わせから北海道旅行を終えるまでも約3カ月だったが、中身の濃い時間を共に過ごし、その思い出を共有しているのでこれからも長く関係を続けていきたい。

3) その他、自由コメント

また、このST でやっていて良かったと思うのは日本人学生同士の集まりである。4年生や医学部の学生もいたため全員で揃うのは難しかったが、日本人学生同士で集まることで、ツアー中にしたいこと、こうすれば良くなるんじゃないかというアイディアを出すことが出来たのだと思う。アイディアを出してくれるのが特定の人だけだとしても、周りがそれを実現するためにサポートすることが出来れば上手くいくだろう。それだけでなく、自分たちのグ

グループ活動が思うように行かなくて悩んだ時に相談しやすいというもある。自分一人で考えても、どうすればいいのかわからなくてさらに落ち込むこともあるかもしれないので、先生や学生同士でそういうことも話しやすい状況があるといいと思う。私の場合、4年生の先輩にしろ1つ下の医学部生にしろ海外経験が豊富でいいお手本が身近にいたのだから、その人たちに比べて圧倒的に自分が力不足なのが分かっていたので、気後れしてしまって自分がグループ活動で上手いかわからないのも話にくい部分もあった。次回は、どのようなメンバーがよく分からないが、自分の不安を話せる人がいると気持ち的にだいぶ楽になると思う。とにかく、留学生とも日本人学生ともしっかり話し合えばその分良いものが出来上がると思うので、私たちよりも更に良いものを創り上げて楽しんでもらいたい。

5. 第二回スタディツアーの概要

ST2 は、学内行事との兼ね合いから、2011 年 7 月 16～18 日にかけて実施された。学生募集は、4 月から行い、勉強会は、5 月から 7 月までの間に実施した。参加希望学生が、多くなることが予想されたため、留学生には、「グループワークで私が貢献出来ること」という作文を課した。この作文は、英語でも日本語でも可とした。その結果、応募者は、日本人学生 13 名、留学生 72 名となった。ST1 と同様に、性別、国籍、学部、属性、学年、日本語レベルを勘案し、日本人学生には面接も行い、計 25 名の参加者を決定した。参加学生の内訳は、表 2 の通りである。

【表 2：参加学生内訳】

男女比	男性 8 名、女性 17 名
国籍・地域	日本 5 名、中国 11 名、韓国 2 名、バングラディシュ 1 名、ベトナム 3 名、台湾 2 名、アメリカ 1 名
学部（研究科）	経済学部 8 名、文化教育学部 11 名、理工学部 3 名、農学部 2 名、医学部 1 名、
身分	学部生 7 名、研究生 2 名、大学院生 5 名、交換留学生 11 名
日本語レベル	初級 10 名、中級 7 名、上級 8 名、日本語ネイティブ 5 名

渡航地、コーディネーターの役割、経費は、ST1 から変更はない。ST1 から大きく変更があった点は、勉強会の回数と他大学との連携である。

ST1 の参加学生から、グループ全員で集まれる時間がなかなかないという相談を多数受けた。そのため、ST2 では、集まる日時を事前に設定し、それらの日時に集まることが可能な学生のみ ST に応募できるようにした。設定した勉強会の回数は、全 7 回で、各回の課題も表 3 のように設定した。全員で集まる時間を事前に確保する事で、学生が課題遂行のみに専念できる環境作りを目指した。

【表 3：勉強会での課題】

5 月 25 日 (18 : 00～19 : 30)	オリエンテーション
6 月 8 日 (18 : 00～19 : 30)	トピック設定
6 月 15 日 (18 : 00～19 : 30)	調査 1
6 月 22 日 (18 : 00～19 : 30)	調査 2
6 月 29 日 (18 : 00～19 : 30)	調査のまとめ
7 月 6 日 (18 : 00～19 : 30)	発表
7 月 13 日 (18 : 00～19 : 30)	旅のしおり作成

ST1 の課題調査の際に、北海道に住んでいる人に直接質問をして、発表資料を作りたいという要望があった。その時は、本稿の筆者が過去に教えた日本人学生にお願いをし、対応してもらった。この北海道の学生とのやり取りがグループワークをより充実したものにしてくれたので、ST2 では、北海道大学の国際交流サークル SACLA に正式に協力依頼をし、オンライン上で調査を手伝ってもらった。また、SACLA の好意で北海道大学キャンパスツアーおよびジンギスカンパーティーも企画してもらえることとなった。北海道大学での滞在時間を多く取ったため、見学先は、サッポロビール工場、北海道大学構内、小樽市街、大倉山展望所、羊ヶ丘展望台と変更した。

6. スタディツアー実施報告（第二回）

6-1. 勉強会での観察から

ST1 では、コーディネーターがグループ編成を決めたが、ST2 では、学生に自分のグループのメンバーを選ばせた。これにより、グループへの責任感が増すと考えたが、メンバーがなかなか決まらずにかなりの時間を費やした。メンバーがすぐに決まらなかった理由は、日本人同士の遠慮と、会ったことがない留学生を国籍や学部、専門だけで選ぶことへの躊躇が

あったようである。最終的にグループ編成が決まり、初回の勉強会で顔合わせが行われた。

【勉強会風景】



ST1 のトピックを参考にし、初回勉強会でトピックと今後の予定を決めてもらった。すぐにトピックが決まったグループは、メンバーの中に既に知り合いがいるグループが多かった。逆に、トピックがなかなか決まらないグループは、全員が初めて会うグループで、打ち解けて自分の考えを話すのに時間がかかっていたようである。また、ST1 とトピックが重複しないようにしようとしていたため、トピック設定に時間がかかっていたようでもある。各グループのトピックは次の通りである。

- A) 北海道の生活（服装、建築、食べ物） B) 北海道の動物
- C) 北海道のお土産 D) 北海道の方言 E) 見学地の概要

ST2 では、毎週勉強会が設定されていた。一週間に一回、必ずグループのメンバーと会えるということは、リーダーである日本人学生のミーティング日程調整の負担を軽減したが、同時に勉強会での学生の集中力がST1 より落ちていた。特に、全7回の勉強会のうち、3～4回目の勉強会では、グループワークに飽きてしまい違うことをし出す留学生が出てきていた。本来なら、リーダーである日本人学生が注意し、役割分担を割り振るべきなのだが、どのグループのリーダーもなかなか軌道修正が出来ていなかったようである。この点に関して振り返ってみると、学生の気の緩みが挙げられる。全部で7回も勉強会があるのだから、のんびりやっても大丈夫という気の緩みが学生の間に生まれてしまったことは間違いない。ST1 では、どれぐらい時間がかかるかを自分たちで予測し、それにかかる最低限のミーティング回

数を自分たちで調整して課題に取り組んでいた。しかし、ST2 ではコーディネーターが、課題を終えるのに必要な時間を計算し、事前に設定していた。これが、逆効果となり、ST2 の勉強会では、緊張感が欠けてしまう結果を生んでしまった。

進展もあった。それは、北海道大学の学生とのオンラインでの交流である。5 グループのうち、3 グループが、実際に北海道大学の学生とメールのやり取りをし、課題に関する質問に答えてもらっていた。これらのグループは、実際に北海道大学を訪れた際に、北海道大学の学生ともすぐに打ち解けていた。

6-2. 勉強会以外での観察から

ST2 では、勉強会以外で集まっていたグループが少なかった。勉強会が毎週設定されているため、勉強会の中で課題に取り組もうと考えているグループがほとんどであった。そのため、ST1 に比べて、学生間の親密度は、勉強会の時点では、あまり深くなっていないように見られた。

6-3. 旅行での様子から

旅行は、欠席者もなく、2 泊 3 日の日程で無事に実施された。勉強会では、よそよそしかったグループも、旅行中は、ぐっと距離が近くなり、打ち解けていた。非日常が、距離を縮めたのかもしれない。もっとも変化が見られたのが、北海道大学の学生との交流である。半日かけてキャンパスツアーとジンギスカンパーティーを企画してくれたのだが、この準備作業を北海道大学の学生と本学の学生とで一緒に行っている内に、徐々に本学の学生同士も打ち解けていた。

【北海道大学 SACLA との交流風景】



6-4. 学生のレポートから

ST1と同様に、ST2の参加学生にも次の3点について振り返りレポートを書いてもらった。ST1では、日本人学生のみであったが、ST2では、留学生にも書いてもらった。紙幅の都合上、ここでは、日本人学生1名と留学生1名のレポートを掲載する。レポートは、原文のままである。

- 1) 北海道STで楽しかった点、困難を感じた点
- 2) 通常の国際交流と北海道STの違いは何か
- 3) その他、自由コメント

学生A（日本：男性）

1) 北海道STで楽しかった点、困難を感じた点

二日目の朝に早起きしてみんなで朝市に行ったことが深く印象に残っている。前日夜中に急遽翌朝行くことを決め、翌朝5時半起きで朝市に向かった。しかし誰一人札幌の町は詳しくなく、地図を片手に道行く人に何度も道を尋ねながら、普通なら30分以内でいけるところを1時間かけて迷いながらやっと到着した。そして美味しい海鮮丼をあまり堪能する時間はなくサッと食べて、帰路についた。帰りは急ぎに急いでずっと走りっぱなしだった。なぜこれが楽しかったかというと、みんなで一つの目的のために協力しながら、例えば今回なら「あっちだよ、iPhoneで調べたらあっちらしい」「でも地図見る限りそっちじゃなくてこっちだよ」「えー、まあ時間ないしとりあえずどっちか行ってみよう！」「じゃあどっちに行く？」などと意見を言い合い、たまには「やっぱこっち違ったじゃん！もう時間ないよ、早く戻ってもう一つのほうに行こう」と少し怒られたり全てが楽しかった。全部が行き当たりばったりですごくおもしろかったが、今回は集合時間にも間に合ったからいいものの、少し間違えていれば他の人達に迷惑を掛けるところだった。やはり下調べはある程度しておく必要もあるし、どこを調べるか決めるためにも計画の大枠は立てておくべきだと改めて感じた。

そして一番おもしろかったことは、実はバスでのランダム席順で隣になった人と喋るということだ。もちろん仲のいい人と喋るのも楽しいが、旅ということもありよく知らない人と一緒に交流を深めていくということがすごくおもしろかった。そして一対一なので相手のことを印象に残しやすい。

難しかった点は、自分の立場である。いくら大多数が知り合いとは言え、立場上はリーダー

一なのでやるべきことはきちんとやらないといけない。私はリーダーや何かを仕切るといったことはほとんど経験がなかったのでどうしていいかわからず終始手探りでやっていたので、特にグループのメンバーには迷惑を掛けたと感じた。みんなの計画や意見をまとめるとき、自分が優柔不断なのもあるがどこで折り合いをつけるべきかいつも分からなかった。

2) 通常の国際交流と北海道 ST の違いは何か

私は、はじめ何のためにみんなで北海道について調べるのか疑問に思った。スタディツアーとはいえ、ほかに勉強すべき・調べるべきテーマがあるだろうと考えていた。実際に始めてみて、三回目の勉強会の時にこのスタディツアーの目的を理解することができた。何を調べるかが重要ではなく、それぞれ小グループのメンバーごとに役割があり、例えばその役割ごとに情報を交換したりするその過程の中で交流することが重要だと気づいた。そのときこのツアーの目的を身をもって理解することができた。やはり自分たちで主体的に行動することが一番重要だ。自分たちだけでやることでまず自分たちのものという感覚ができる。そして目標や目的をつくりやることにより今度は一体感が生まれる。このようにただ旅行に行き楽しむだけよりも深い関係ができるからだろう。

3) その他、自由コメント

今回はどのグループもあまり元々決められていた勉強会以外で集まることもなかった。その勉強会以外の時間で集まってやることにより、この関係は北海道のためだけではないと思わせることができプライベートな関係も作りやすくなる考える。だから次回はもっと勉強会を減らすまた時間を短くしてもいいだろうと思う。最低ラインさえ決めていればあとはみんな必死でやると思うので、そうしたらもっと関係が作りやすいだろう。

学生 B (中国 : 男性)

I am so luck and I am gratitude to our university for giving me so cherish to travel to Hokkaido from July 16 to 18. But before we go, all of us should take part in a study meeting six times. We should check much information about our destination with members, and prepare PPT and lecture to them. I have learned more about Japanese culture and habits by this meeting, like food culture of Japan, the life style of Hokkaido, the special local products in Hokkaido and interesting places. But there is a small pity that I can't understand the Japanese language, so I lose a lot of information when I chat with Japanese

friend.

Although I came back from Hokkaido 20 days ago, I also feel the study trip has happened just a few minutes ago. This was a wonderful trip that made me think of the fairyland.

Hokkaido is located in the north of Japan, and the largest city is its capital-Sapporo. In my memory, Sapporo is city focus on travel, and attracts many people to there every year. Because there have humid weather and have an appropriate temperature in summer, delicate ice art and huge snow view in winter. If you have a chance to visit Hokkaido, you would be attracted by the wonderland.

Hokkaido is an amazing place, and I was attracted by its humid weather and clear sky. I think there is the cleanest region in the world. Importantly, staying here, I feel I live in an oxygen bar and I breathe pure oxygen every circle.

As for me, I have to spend much time on my PH.D in my laboratory, so, I don't have enough chance to make friend. After that trip, I found I recognized more foreigner friend from other country like Korea, Bangladeshi and Unite state etc. I make friend with them, and say hello with them when I met them in our campus.

Exactly, I know nothing about Japan before Japan I came here, I don't speak Japanese and I did not search any information about Japan or Saga. But after that trip, I am trying my best to adapt to Japanese society; and learn the excellent character and spirit of Japanese.

In a word, this is a wonderful trip, and it is made a deep memory in my head. Thanks my group member for contributing to this trip. I am gratitude to Yamada sensei for his kind and passionate lead. We also hope the great dream of Yamada sensei can be come true soon——To be a bridge of friend between with every country!

7. 全体を通した振り返り

ST1、ST2 を通して、成功した点、改善点が見えてきた。ここでは、ST1 と ST2 の比較及びび学生レポートから、1) グループ活動、2) コーディネーターの介入、3) 交流の持続性、4) 学生の変化の4点について振り返ってみたい。

7-1. グループ活動

ST1、ST2 のどちらを通しても、日本人1名に対し留学生4名というグループ構成は、良い変化をもたらしたようである。ST 開始前の予想通り、日本人が一人で留学生4名と接する

ため、日本人学生の責任感が増していくことが観察された。また、日本人学生同士の繋がりも強化されていった。自分のグループでうまくいっていないことを、他グループの日本人学生に相談することで、問題の共有が自然と出来、結束が深まっていったようである。

グループ編成も一定の効果を発揮した。同じ国籍、母語を持つものを同じグループに入れないようにしたため、共通言語が自然と日本語（まれに英語）になっていたようである。しかしながら、グループ内での日本語の教え合いは、あまり見られなかった。一つのグループに日本語初級、中級、上級レベルの留学生を配置することで、上級者が中級、初級者への日本語支援を行うであろうと筆者は予想していたが、結果は、その逆で、上級レベルの学生が自分より日本語レベルが下の学生に日本語の支援を行う場面は、あまり観察されなかった。特に、初級レベルの学生の発言が理解できないときは、上級レベルの学生が、こういう意味ですねとすぐに遮り、日本人学生や他の留学生に伝えていたのが印象的であった。日本人学生は、初級レベルの学生に対しても非常に親切であるが、上級レベルの留学生は、初級レベルから学習を始め、上級レベルに達しているため、初級レベルの学生に対して、厳しい対応をするのかもしれない。

興味深いことに、グループ活動の後半では、上級レベルの学生が、初級レベルの学生の日本語を支援する場面に出くわすことが多くなった。但し、これは、初級レベルの学生が、社会調査や発表資料作成でグループに貢献をして、存在を認知された後のみ、観察された。通常の国際交流イベントでは、日本語が出来るかどうか、ひとつの価値基準になることが多い。しかし、STのような長期型の課題遂行を目的としたプロジェクトでは、日本語だけに依存しない協同作業が多く存在するため、日本語が出来ない学生でも自分の居場所、つまり明確な役割を見つけることが出来る。このことから、日本語レベルの異なる学生で協同学習を行う際は、日本語だけではなく、他のスキルで貢献出来る機会を設けることが重要であることが分かった。

7-2. コーディネーターの介入

ST1 と ST2 では、コーディネーターの介入の度合いが違う。ST1 では、学生達が自分たちで、いろいろと決めるデザインであったのに対し、ST2 では、コーディネーターが枠組みを決めすぎた感がある。特に、勉強会の日時を決めたことは、大きな失敗であった。学生の負担を減らし、ST を上手く運営したいという気持ちから、コーディネーターは、グランドデザインをタイトにし、指示を与えすぎたのかもしれない。その結果、ST2 に参加した学生は、

コーディネーターの指示を待つ傾向が強くなってしまった。この種のプロジェクトでは、時間はかかっても、学生が自分たちで進む道を決めていくことで自律が育まれるので、最低限の枠組みは、どこまでなのかを良く見極めたグランドデザインを行う必要がある。

7-3. 交流の持続性

STの目的は、留学生と日本人学生の持続する関係の基礎を作ることにある。この目的は、概ね達成できた。何をもって、関係が持続しているかは、議論の余地が残るが、少なくとも既存の学内国際交流イベントよりは、格段に学生の関係が深いものになっている。ST終了後も、バーベキューをしようと集まったり、試験勉強を一緒にしたり、グループのメンバーの自宅に集まったりと、交流が日常生活に波及している。帰国してしまった留学生とは、Facebook上でやり取りをし、ST1から2年が経った今でも、当時の写真にコメントを付けたりしているようである。

また、興味深いのは、大学院生が率先して集まろうと声をかけていることである。本来なら、研究で忙しいはずの大学院生が、STで知り合った日本人学生、留学生との時間に高い価値を置き、積極的に集まる機会を設けていることは意外であった。更に、大学院生が自国の留学生や研究室の仲間を連れてくるので、STを起点とし学内の交流が派生的に広がっている。

このような深い関係の萌芽は、前掲の学生レポートにもあるとおり、長期に渡って共通の課題に取り組んだからに間違いない。数時間の国際交流イベントでは、なかなか本音を探ることは難しく、知り合いにはなれても、その関係を持続させることは難しい。反面、STのようなプロジェクトでは、長期に渡り、異なる言語、文化的背景を持つ相手と課題に取り組むため、相手の良い面と理解しにくい面を天秤にかけながら、付き合い方をじっくりと模索できる。その証拠に、ST1の参加学生の方が、交流が深くかつ長く続いている感がある。ST1の参加学生は、自分たちで、集まる日時、役割分担を決めて、誤解を乗り越えながら、課題をこなしていったことで、異文化へのアプローチのトレーニングが自然と身についたからだと予想できる。

大変な課題の後に、メンバーとの楽しい時間があるという、濃淡がついた交流は、学生の意識変化をもたらし、関係性にも影響を及ぼす。楽しいだけの交流から生まれる関係は、すぐに消えてしまう可能性を孕む。翻って、時間をかけて壁を共に乗り越えて構築された関係は、持続する確率が高いと言えよう。

7-4. 学生の変化

学生の意識で、もっとも大きい変化が見られたのが、日本語が出来ない留学生の日本語に対する意識である。当初は、英語を話していた留学生が、日本語上級レベルの学生と日本人が日本語で話すのを目にし、徐々に日本語で話すようになっていった。もちろん、すぐには話せるようにはならないので、電子辞書を片手に、周りに助けてもらいながらであるが、その姿は、非常に印象的であった。伝えたいことがあるから、勉強するといった至極明快な構図が学習意欲を高める。その証左として、上記の初級レベル学習者の多くが、留学生センターが開講している日本語クラスを履修しだしている。今までは、必要のなかった日本語が、伝えたい相手が出てきたため、価値を持つようになったのであろう。

日本人学生の変化を見てみると、ST1、ST2 に参加した全員が、留学生のタフさに感銘を受けていた。異国で働きながら学ぶ留学生や明確な目標を持って留学してきている留学生を目の当たりにし、自身の置かれている環境を見つめ直したようである。

異文化に対する見方が変わったと答える日本人学生も多かった。もっとも多かったのは、中国に対する見方が変わったというものであった。テレビやニュースで報道される、ある種、傲慢な中国像が融解し、自分の経験値から、好意的に中国人、中国という国を捉えられるようになった学生が増えた。中には、ST がきっかけで、中国に一年間留学を決め、現在も中国の大学で留学中の学生もいる。

8. 今後の課題

今後の課題として、コーディネーターの介入度合いの考慮と提携大学との連携授業が挙げられる。

コーディネーターの介入に関しては、極力介入を控え、参加学生が自分たちで考えてプロジェクトをデザイン出来る大きい枠組みのみを提供できるようにしたい。勉強会の日時設定も、今回の ST では行わず、自分たちで集まり、決めてもらうことを考えている。大変ではあるが、その方が、持続する関係の萌芽が期待できることが分かったためである。

また、見学地も、事前に大学側で設定するのではなく、学生自身で見学地を決めてフィールドワークを行うタイプの ST も検討している。

ST2 では、北海道大学の学生が献身的に協力してくれた。この他大学との交流は、非常に有意義なものとなったため、次回 ST でも計画している。ゆくゆくは、共通の課題についてオンラインで調査し、実際に現地で共同調査を行う形態の ST としたい。そのために、大学

同士の連携授業も視野に入れていきたい。

9. 結び

ST は、留学生と日本人学生の交流のきっかけを提供し、持続する関係の土台を作る事を狙いとして、企画された。ST1 と ST2 に参加した学生を見る限り、狙いは、概ね達成できているが、この成功には、必然の要因が存在している。その要因を、本稿では、多種多様な属性を持つグループ編成による、長期間の協同プロジェクトを例として、検証してきたが、留学生と日本人学生の交流を支える要因は、他にもあるはずである。今後も、この種のプロジェクトに関わることがあるならば、留学生と日本人学生の交流を支える要因を検証していき、教育の現場に還元していきたい。

世の中で懸念されている程、日本人学生は内向き志向ではない。ST を通じて、そのことを体感できた。同じく、留学生と日本人学生の日常での自然な交流が続くことも目の当たりにしている。我々、教職員にとって重要なことは、学生が異質なものの、つまり異文化への耐性をつけるトレーニングをしっかりとしたグランドデザインのもとで行えるように支援することではないだろうか。ST がその一助になり、留学生と日本人学生の気取らない交流が続いていくことを切に願う。

参考文献

- 1) Vygotsky, L. S. (1978) *Mind in society.: The development of higher psychological processes.* Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 2) エリザベス＝バークレイ他著、安永悟監訳（2009）『協同学習の技法』ナカニシヤ出版
- 3) 杉江修治他編著（2004）『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部
- 4) 山田智久（2011）「国際交流に関する大学生の意識調査 ～PAC 分析調査の結果を中心に～」『佐賀大学留学生センター紀要』第 10 号、29-40 頁

(佐賀大学留学生センター 専任講師)